

# 内田堯の生涯

—海外に生きた同志社人

竹 中 正 夫



内 田 堯 夫 妻

海外雄飛を青年の壮志とした新島襄を校祖とする同志社は、昔から外国で活躍した幾多の先達たちを輩出してきた。今日でこそ外国に旅することはいとも簡単な日常茶飯な出来事となっているが、新島襄が渡航したときは文字通り、生命がけの壮挙であった。ジェット機に乗って農協の観光団がヨーロッパを廻り、高校生が夏休みを利用して親善旅行をすることが日常化している昨今、昔の同志社人がいかに苦心と忍耐をもって海外生活に励んだかは、わたしたちの想像をこえるものがある。短期間の海外旅行は物珍らしい外国の風物に触れ気分を転換させ、視野を広くする点からも楽しいものである。しかし、ひとたび外国に定住し、その国の言葉を習得し、その国の人々と対等につきあい、ひろい心をもった日本人として外国に生きることは、決して容易なことではない。海外の生活は、表面的には華やかにみえるが、永い滞在のなかでボケてしまわず、また、誘惑に陥ってしまわず、排日の時勢にあつてその国になじみながら日本人としての特色を生かして国際社会の間にあつて架け橋となつて働くことは、並たいていなことではない。

そのような海外に生きた同志社人の代表的な例として内田堯氏の生涯を考えてみることに出来るかと思う。

### 生いたち

内田堯氏は、一八八四年（明治一七年）四月十二日に京都府、綾部町に生れた。父を恒豊といい、母をかつといった。父はもと士族であったが維新の変動から学校の教師となった。内田氏は、四人の姉妹の中の一人の男子という貴重な存在であった。父恒豊は、四十二才の働きざかりで、ふとした病から急逝したため一家は、にわかには苦境に陥った。三十三才にして未亡人となったかつは、十四才を頭に五人の小さな子供たちをかかえて、一時は途方にくれた。そこで親族会議が開かれた。そこにおける大方の意見で二人の姉、珠子と君子は奉公に出し、堯と下の妹ふみは親戚に預け、母は三才になる一番下の子、美津を連れて里に帰るようというのであった。家屋敷を売払って亡父の薬餌料を支払った。家に小額の公債があったので、かつはそれを売って長女珠子を女学校に送りたいと主張した。しかし、「これは、祖先が槍先の功

名によって得たものだから、女の子の教育に使うことは許さぬ」①

という親族の言葉によって否定された。女子教育がいかに至難なことであったかはこのことでもわかる。

そのころ十才であった堯少年は舞鶴の叔父清水康五郎に引き取られることになった。清水は恒豊の弟にあたり、舞鶴の明倫小学校の校長をしていた。

さて、かつは、末娘美津を連れて里に帰った。かつの実家は、綾部から又奥に入った何鹿郡の山家にある、坂根家であった。山あいの村では、しぐれが多く、裏山の竹林は、いつもつゆでしめっていた。母は、四散した幼い子供たちの身の上を思うては、夕ぐれになると涙にぬれていた。亡夫の四十九日をすませると、自ら深く決心して美津を祖母に托し、単身上京して自活の途を求めた。別にあてもなかったかつは、京都で牛乳屋をしていた知人の赤木をたずねた。赤木は、自分が牛乳を配達している外人の家でちょうど家事の手伝いをする婦人を探していることを紹介してくれた。その外人というのが同志社で教鞭をとっていたドワイト・W・ラーネッドであ

った。このことは、内田家を同志社と結びつける不思議な縁となったのみならず、聖書の信仰に導きつけかけともなった。人間の一生には、実にはからざる道がそなえられているものである。かくて、かつは、ラーネッドの家で十年間料理や家事を受けもってまめに働いた。

### 同志社時代

舞鶴で高等小学校をおえた堯少年は、ラーネッドのすすめもあり、京都に來り、同志社普通学校で学ぶようになった。ラーネッドは労働の神聖であることを説き、額に汗しながら働きつつ勉強する自立の精神がいかに尊いものであるかを教えた。堯少年は、牛乳くぼりをしたり、夜間、同志社の電話の受付を担当したりして働きながら勉強した。彼は、同志社時代を懐しく省み、こういつている。

「自分の同志社時代は睡眠不足とのたたかいであった。夜間電話室で働いていたとき腹がすくだろうと、焼いもとどけてくれた人のなさげが忘れられなかった」②

彼は後に、同志社の学生たちのため自分の



1901年3月18日、京都で再会した内田家の人びと

費用を節約して、奨学金を送ったが、これはこのような自分の体験から来ている。自分が貧しさの中に苦勞して勉学した故に、同じように苦學する同志社の後輩たちのことを忘れてしまったのである。彼は自分が受けた人のなさを忘れない人であった。

そのころラーネッドの家ではしばしば家庭集會が開かれていた。家事の仕事をやりくり

しては、かつもその集會に出るのをたのしみにしてきた。ラーネッドは、所々に離散しているかつの子供たちのことを配慮し、子供たちを京都によびよせ、ラーネッドの家の裏に住わせた。かくて堯少年の姉妹さん、君さんそして妹ふみさんと美津ちゃんがあちこちより集り感激のリユニオンを体験した。散らされた家族のものたちが再會するよろこびにまさるものはない。

一緒に京都に集ったものの内田家の生活は依然として貧しいものであった。成長ざかりの子供たちはまだ勉学中であり、何かと費用がかさんだため、かつは苦心をしながら子供たちの養育に励んだ。ラーネッドの家で肉をとるべるとその残りのジュースに少々野菜を入れて子供たちに食べさせたりした。その食卓は貧しい食卓であったが、一家の者たちが感謝と素朴なよろこびを共にする食卓であった。

堯少年は、同志社に来て知的な刺激を受けた。当時の同志社は非常に高い水準をもっていった。勉強をよくするものは評価され、怠けているものは、どんなによい家庭から来ても学校から追い出されることさえあった。

少し以前のことであったが、新島夫人、八重さんが会津出身である関係もあって、会津の殿様松平侯の息子が同志社に来て学んでいた。彼は、名門の出身であったが、勉学に励むより遊興にふけたので、同志社から退校させられている。

堯少年の場合はその逆であった。彼は、父もなく、名もなく、金もなく、夜は電話の受け付けをしながら勉学に励んでいた。地位や身分の如何をとわず働くものが報いられ、自分に与えられた賜物を生かして誠実に励むものが評価されることは、教育にとっても社会にとっても大切なことである。内田少年は入学後二年目に試験を受け、その成績が優秀であったため、当時五年で終えるコースを四年ですませることが出来たという。

同志社が内田氏に与えたものは、自立の精神と、知的な教養の外に、大きな賜物があつた。それは、聖書に根ざしたキリスト教の精神であった。彼は、封建的な丹波の山奥で生まれ、幼くして父を失い遠く叔父の下で育てられた。古い日本の中にある人間関係の桎梏を彼はつぶさに経験していた。そこでは人間と人間が集団の中で伝統的なしきたりや上下の

身分制度中で拘束されていた。すべての人間は神によって造られたものであり、神の愛の対象であるという聖書の人格主義は、若少年に新しい視点を与えた。とくに、自らが逆境の身にあり、孤独をかこっているとき、独子を

も与えるほど世を愛したという神の愛は彼に深い感銘を与えた。自分の生涯をキリストの愛にこたえる生涯であるようにという決意をかため、一九〇一年京都洛陽教会において洗礼を受けた。彼に洗礼をさずけたのは、当時同志社で教鞭をとっていたオーティス・ケリーであった。彼は、明治十一年三月、アメリカン・ボードの宣教師の一人として来日し、岡山の開拓伝道にあたり、のち同志社で教鞭をとっていた。彼は丹念に資料をあつめ、強い意志をもって、前後二巻にわたる日本教会史を書きあげた。<sup>③</sup>

この教会史は一九〇九年に出版されたものであるが、六〇年を経た今日でも日本教会史の貴重な文献として高く評価されている。ケリー一家は、祖父のオーティス、息子のフランカ（元同志社理事）、娘のアリス（元アメリカン・ボード日本担当幹事）、そして三代目のオーティス（現同大教授・アーモスト館長）

と三代にわたって引き続き同志社に尽力していることは周知の通りである。

### 海外への第一歩

さて、内田さんは、一九〇三年（明治三十六年）同志社普通学校を幾多の想い出を刻んで卒業した。同志社は、無一文で行季一つをもってやって来たこの少年を豊かに成育させた。彼は知的にも肉体的にも、そして、精神的にも成長した。卒業と同時に、彼は、海外に赴くことを決意した。彼は狭い日本の中で多くの人々間でせせこましく、古い人間関係にしばられて生きるより海外に出て、ひろびろとした気持で働いてみたかった。それに、何よりも、同志社で培われたキリスト教に根ざしたヒューマニズムが彼を海外の開拓的な仕事へと向かわしめた。かくて、丹波の山奥で育った少年は、海をこえ海外に生きる日本人となるようになったのである。

海外渡航の準備もなり、内田さんは、同志社を卒業すると間もなく同志社の先輩であった福田牧師の紹介により、明治三十六年の十

一月にハワイに渡り、同地のリフエ小学校において日本語を教えることになった。三年にわたるハワイの生活は矢のように過ぎ去った。はじめて外地に来たことによる緊張からいろいろ失敗をしたり、二十才前後の血気さかんな青年にとっては誘惑もあり、またカンにさわることも少くなかった。しかし、内田青年を支えたものは、同志社において培われたキリスト教の信仰と自分を信頼してくれている家族のものたちのげましであった。彼は余暇を見出すとハワイの教会に出席し、教会学校の教師をつとめたりした。ハワイで彼が得た月給は、二十五ドルであったが、彼はそれを節約し、そのなかから毎月一〇ドルを妹のふみと美津の教育費のため送りつづけた。ふみは不幸にして在学中に早逝したが、美津は兄の期待にこたえ、同志社女学校普通部を卒業した。

ちなみに、美津は、のちに渡米し、オークランドで医師早石実蔵氏と結婚した。その息子修氏は、京都大学医学部において医化学の教授であり、酸素添加酵素（Oxygenases）の研究では世界的に著名な学者であり、一九六七年には学士院賞を受賞している。

## 米大陸へ

内田さんのかねてからのねがいは、米大陸にわたることであった。これよりさき姉珠子は梅花女学校を卒業すると、同志社を卒業した熊井隆之助と結婚し、シアトルの東洋貿易株式会社勤めていた。やがて母かつも熊井夫妻の招きによって渡米し、シアトルで生活していた。そのころ、内田さんの妹ふみさんが亡くなり母かつは悲しみの中に毎日を通していたことを伝え聞いて、人一倍母親おもしろい内田さんは、何とかして大陸に渡り母を慰めたいと考えていた。

かくて、一九〇六年、内田さんはシアトルに渡り、古屋商店で働き、間もなく、ポートランドの古屋商店の支店長となった。

日露戦争直後、日本は国力上昇期にあり、多くの日本人が米国の西海岸に新天地を求め移住して行った時代である。古屋商店は、そのような日本人に対して雑貨を売るのみでなく、到着して間もない日本人の世話をしたり、日米通商の玄関番のような役割を果たしていた。他人に対しては、つとめて寛大であり、他の欠点をあげつらうよりは、むしろ他人の長所を見損っていないかと注意をはらっていた。

た。そのため、時折り人からだまされるようなことがあっても彼は一向それを気にかけていなかった。「神様はすべてのことをご存知である。彼の計算にはまちがいない。彼は公平な方である。」という素朴な信仰がその奥底にはあった。反面、彼は自分に対してはきわめてきびしかった。自分が与えられている時間を生かして用いているかを吟味し、時間を厳しく励行した。又、無駄づかいや浪費を

つつしみ、自分は酒も煙草ものまじりたつて質素な生活を常とした。時として、真実をこめて人に忠言することがあったが、それは、他人を傷つけようとする意図からではなく、その人を思うがゆゑのことばであった。彼は、かなり遠慮なく語ったが、彼のことばには謀りごとがなく、真実と親切がこもっていた。周囲の人々の信望をあつめ、内田さんのポートランド生活は約一〇年つづいた。

君子(二女)

新郎  
内田 堯

美津(四女)

新婦  
内田 郁子

熊井珠子(長女)

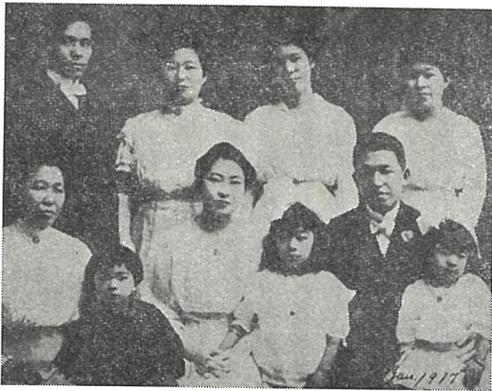
熊井隆之助

母 かつ

(内田堯・郁子結婚式における家族の再会)

## 三つの転期

一九一七年は、内田さんの生涯にとっては三つの大きな転期の年となった。第一にその年の一月、かねて婚約中の榎垣郁子さんと結婚した。郁子夫人は同志社女学校高等部卒業生であり、キリスト教信仰の中にはぐくまれ、豊かな日本の教養をもった女性であった。そのころ、京都のラーネ



ツドと中瀬古六郎は、内田さんによい伴侶を見つげようとひそかに気をくばっていた。二人の意見は榎垣郁子さんを推すことにおいて一致した。かくて、話は順調に進み、一九一六年婚約をなし、同年十一月郁子さんは、中瀬古六郎に伴われ渡米し、シアトルに上陸し一九一七年一月三日、ポーランド市において結婚式をあげた。堯氏は三十三才、郁子さんは二十四才、理想的な同志社カップルがここに誕生した。

かつては、ちりちりばらばらになっていた姉妹たちが母とともにこの結婚式に集まった。美津は翌年前述の早石氏と結婚をし、君子は増田浦次郎に嫁した。

内田さんの家庭には、二人の娘が与えられた。現在イェール大学の数学教授をしている角谷静雄夫人の恵子さん。いま一人は、童話作家として、また日本の民芸の研究者として活躍しておられる淑子さんである。角谷教授は、一九三五年、大阪大学の数学科助教授になり早くから注目され、因数分解と確率論の領域で世界的業績をおさめ、一九四九年渡米し、一九五三年にはイェール大学の数学教授となった。一九六二年には、ユーージーン・ヒ

ギンス記念特別教授に任命されている。おそらく、戦後海を渡った多くの日本人学者の中で、最初の人とは、湯川教授と角谷教授であったと思う。角谷夫妻の間には道子さんという可愛い女の子が与えられ、晩年の内田夫妻はその成長をたのしみしていた。

一九五五年一月、初孫の道子さんの誕生を伝えきいて郁子夫人はつぎのようにうたっておられる。④

紅梅の二つ四つ咲きし朝まだき

初孫生れし音づれを聞く

あどけなき幼な児の面見入りつつ

眼にて笑む人七十路にして

次女の淑子さんはカルフォルニア大学に学び、女子教育の名門スミス・カレッジを卒業したのち、ニューヨークの世界学生基督者連盟のオフィスで働いていたが、最近日本の民芸と民話の研究に打ちこみ、日本文化を海外にそのペンを通して紹介しておられる。すでに出版された十数冊の書物は英語からドイツ語やフランス語にも訳されている。この二人の娘たちをもった内田夫妻は幸福な父母であるとともに、このような信仰の父母をもった子供たちもしあわせな子供たちであった。

「あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう。

あなたの妻は家の奥にいて

多くの実を結ぶぶどうの木のようにであり、

あなたの子供たちは食卓を囲んで、

オリブの若木のようにである。」(詩篇一二八篇)

聖書が祝福している家庭生活のめぐみは、内田家のなかに宿っていた。

さて、一九一七年におきた第二の出来事は職場の変更であった。内田さんは、十年勤めた古屋商店をやめ、三井物産に勤めるようになった。長年勤めた古屋商店を去るにはしづびがたい気持がしたが、関係者から懇望されついに意を決し三井物産に移った。彼はそれ以来一九四一年戦争によって日本人収容所に入るまで、二十四年間三井物産につとめ、のちにはサンフランシスコ支店長代理となった。ここにも内田さんの誠実な人柄がよくあらわれている。すなわち、一たんその仕事をひきうけると、それを責任をもってなし遂げる強い責任感を彼はもっていた。

一九一七年、結婚とともに彼は三井物産に転じ、さらに永年住みなれたポートランドを

去ってサンフランシスコに移った。一年中ても雨の多いポートランドとちがってカラリと晴れたサンフランシスコは住むには好適の地であった。東部のように厳しい寒さに見舞われることもなく、南部のように酷暑に悩まされたところでなく、一年中気持のよい気候に恵まれたところであった。それに、彼が一九〇六年ハワイからはじめて米大陸の地をふんだのもこのサンフランシスコであった。朝もやが晴れて、船がサンフランシスコの港湾に入ったときクッキリとしたコバルトの空の下にスペイン風の白亜の家々が丘陵に並び、整然とした歩道にみどりの街路樹が点々と見えた。明るい一種のエキゾチックな情趣が彼の心をとらえた。やがて彼らはパークレーのストゥワード街に居を構え、のちにオークランドに移り、彼の生涯の終りまでそこに住んだ。パークレーの小高い丘陵にのぼって、対岸の静かに横にひろがるサンフランシスコの夜景をみるのがたのしみであった。そこは、日本との交流の門戸であり、内田さんが約五十年にわたって苦楽を共にした第二の故郷でもあった。⑤

### 教会の生活

一九一七年、サンフランシスコに移ると、内田さんは、オークランドのシカモア組合教会の会員となり、死に至るまで忠実な教会生活を送った。というとう極めて単調平穏なようにきこえるが、平凡のなかに非凡を見、日常性のなかに非常的な緊張をもって事にあたるという点からいうなら、それは、決して安逸な日々ではなかった。

シカモア組合教会では、日曜学校の教師をひきうけ、子供たちと聖書を学び、役員を永年つとめて教会の財政に心をくばったりした。とくにシカモア教会は会員数も少く、決して経済的に豊かではなかったので、少数の人々がその重荷を負わねばならなかった。また、小さい教会では、無牧になることがしばしばあった。そんなとき、内田さんは、週報の印刷や発送などの事務を担当したり、教会員に問安の手紙を出したりなどして、教会の働きを助けた。また近くの太平洋神学校で学んでいる日本からの留学生の世話をするのを喜びとしていた。彼の教会生活を省みて、シカモア教会の教友宇野由之はつぎのようにいっている。

「内田さんは教理とか信条とかをやかましくいうより、聖書の証しする「神の愛」を常に感じ、自らも神と人を愛し、愛そうと努力したかたであります。それ故、大変エキユメニカルなクリスチャンで、教会外の人々、他宗教の人々にも常に笑顔をもって接しておられました。それは他者の信仰を重んじ、自らを絶対化されなかったからであります。」

マタイ伝の大審判のキリストの話に「これ等のいと小さな者の一人にしたるは、すなわち、我にしたるなり」との天なる主の、聖言がありますが、教会が飢えていた時、困っていた時に、つねに、よろこんでその難局をになって、責任を執られたのは内田さんでありました。」⑥

内田さんの心情のなかには、受けた恵みに淡々と答えるという気持が一貫として流れていた。それは自分の生涯の体験からきた信念であり、聖書の信仰に裏づけされたものであった。自分のように逆境にあった者も、神は見捨てず、よき師、よき友を与えて今日に至らした。それにこたえのが自分の今日のつとめであり、それをすることは、あたり前の



早石家を訪ねた内田家の人々

ことであるという考えが内田さんの真情であった。他人に善を行なうことを彼は当然のこととして、淡々と行なった。人が認めようが認めまいが、文句をいう人があろうがなかるうが他人を助けることは、自分として当然すべきことであるという信念をもっていた。だから極力右の手でしたことを左の手に知らせず、なるべく目立たないように、淡々として

善行に励んだ。聖書はどんなにすぐれた善行によっても、人は救いにあづかるのではなく、人は何ら人間の業を誇りとなし得ないことを語っている。

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行ないによるのではない。それはだれも誇ることがないためなのである。」(エペソ二ノ八一―九)

善行は、救いの手段ではないが、神の恵みに対する応答として大切な意味をもっている。わたしたちは、神の愛に応えて善行に励むように招かれているのである。

「わたしたちは、神の作品であって、良い行ないをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行ないそして日を過ごすように、あらかじめ備えて下さったのである。」(エペソ二ノ一〇)

#### 同志社をおもうころ

このような気持から、内田さんは、母校同志社から受けた恵みを忘れることが出来な

った。彼は戦前、戦後、同志社の卒業生が渡米するときと、サンフランシスコの港に出迎えにゆき、市内外の案内や北米での生活のオリエンテーションをするのを常としていた。

戦後同志社の神学生のため、北米に神学教育後援会をつくり、友人たちに肉筆を書き添えて寄附の依頼をし、毎年同志社に拠金を續けてされた。同志社にいるものの中には米國から来るお金といえはヒモつきであったり、大金持の余剰金であると思つたものもいたかも知れないが、神学生のため内田さんが集めた金は、ほとんどすべて六十五才をこえた日本人一世による献金であった。内田さんに頼まれたらことわれないといつて同志社とは全く関係のない老人が、老後の生活費の一部をさいて献金を寄せてこられた。内田さんはそれらの人々に一つ一つ受取りを出し、報告書を送り、ときより学校のニュースを送つたりして後援活動を丹念に黙々と十年間続けた。

#### ラーネッドとの師弟の情

ラーネッドは、ニューヨークランドの名門の家に生れ、一八七〇年イェール大学を優秀

な成績で卒業し、つづいて哲学博士の学位をとり、しばらく米国にて教鞭をとったのち、新島襄の創立した同志社のことを伝えきき、アメリカンボードの宣教師として、一八七五年、来日した。翌年四月より正式に同志社の教師となり、一九二八年、八十才にして日本を去るまで五十二年にわたって同志社に留り同志社を愛し、学的に、人格的に多大の貢献をなし、多くの人々から敬愛された。⑦

ラーネッドは、ギリシヤ語に通じ、聖書神学のほか、教会史を講じた。彼は講義を一度担当すると周到な用意をもってあたり、その講義は学生たちによって筆記され、のちに出版された。四福音の註釈、使徒行伝、牧会書簡、それに黙示録に至るまで、ほとんど新約二十七巻の註解をなし出版したほか、長年にわたって教えた基督教教会史も八一八頁の大著として出版され三版も重ねている。

彼は博学で、神学のほか算術、代数、幾何三角術、両軸幾何、英語、それに体操まで広範な科目を担当したが、とりわけ有名なのは学生の希望により教えた経済学と政治学でそれらは近代日本の社会思想の発展に顕著な貢献をなした。彼の思想は「右手に聖書、左手

に経済学」⑧といわれ経済学を単に、富を得るための学問とせず、それは、「産業社会の学であり」それによって、社会の問題を解決する道を考究することをつとめ、資本主義の弊害を認め、その対策としての共産主義、社会主義をいち早く紹介し、又、その批判をなし、政府がなすべき社会政策の大綱を論及している。これらの講義はその弟子たちによって筆記され出版されている。すなわち全四巻、七七〇頁にわたる「経済新論」（明治十九年刊）「経済学之原理」（明治二十四年）

としてあらわされている。住谷悦治氏は、これらのラーネッドの業績は日本の初期の経済思想の形成においてきわめてすぐれた貢献をしたものであり、その価値は、福沢諭吉の「民間経済録」（明治十一年）や天野為之の「経済原論」（明治十九年）、田口卯吉の「日本経済論（明治十五年）」と比肩して、優るといっても決して劣るものでないと評価している。⑨

ラーネッドは博識であったがきわめて謙遜な態度をもって学生に接し、いささかも自己の知識を誇るようなことはなく、むしろ、知らないことは知らないと卒直にこたえてい

た。学生たちの質問に対して知らないときは「アイ・ドント・ノウ」といっていささかも恥じることなく、「天地の間、人間の知っていること、まことに僅かであります。」と淡々とのべていた。⑩

内田さんがラーネッドから受けた感化は、そのような知的影響もさることながら、ラーネッドのキリスト教信仰に基づいた生活態度に学ぶところが多くあった。内田さんは生涯時間厳守を励行した人であったが、これもラーネッドの生活から学んだものであった。ラーネッドは、哲学者カントのように規則正しい生活をし、いささかもその生活のリズムを狂わすようなところがなかった。又彼はいつも自分の与えられた職分に誠実に励むことを旨として、休講をすることはほとんどなく、その講義も梗概をあらかじめ配り、綿密な準備をしてこれにあたったので、学生たちはその誠意に打たれて啓発されるところが少なくなかった。さらに、彼は、キリスト者の生涯はキリストの十字架に従う生活であり、自己犠牲の道であると理解し、自分の生活を律し他者のため尽すことをねがいでいた。「生きるために学び、学ぶために生きる」

(Learn to live and live to learn) という  
研学の姿勢、時間であれ、金であれ、才能であれ、自分に与えられた賜物を活かして用うる生活態度、そして、自己の職業を召命として責任をもって行なう使命感、さらに、自分の利益の追求のみを考えるのではなく十字架を負って他者のために尽す自己犠牲の精神、これらはキリスト教の倫理において重要な要素であり、ラーネットの生活の中に生きて働いていた精神であった。そして、それらの生活倫理は、ラーネットを通して内田さんの日常生活の中にも根をおろして形成されていたのである。

さて、内田さんは、卒業後、ハワイにいるときも、ポーランドで仕事に励んでいたときも、またサンフランシスコに住むようになって、たえずラーネット夫妻と文通をかわして安否をといあった。前述のように、彼の結婚もラーネットの配慮にあづかるものであった。数千キロにわたる太平洋の大海も彼ら師弟の情を距てることは出来なかった。

一九二八年ラーネット夫妻は、八〇才に達し、五十一年にわたって心血を注いで励んだ同志社を去り、アメリカに隠退することにな

った。同志社では、心をこめた送別のつどいがひらかれその別れを惜しんだ。

泰けき空に聳ゆを富士のごと

けだかき君のしたわしきかな

という小川清澄のささげたうたと共に、富士山の額が彼におくられた。

ラーネット夫妻は、横浜を出航し、ロスアンジェルスに向った。彼らは隠退宣教師のホームのあるロスアンジェルス郊外のクレアモントに落ち着くことになっていた。その途上船はサンフランシスコに一停泊した。

内田さんは、ラーネット夫妻をサンフランシスコの港頭に出迎え、バークレーの自宅に案内し、その夜彼は内田家の客となり、旧交を温めた。それ以後、内田さんは毎年正月元旦には、南加に住む母かつを訪ね、母とともに、一家で近郊クレアモントの「ビルグリム・プレイス」にラーネット夫妻を訪ねることを年申行事としていた。

ラーネット夫妻訪問のときの模様をうたった郁子夫人のうたは、師弟の美しい交わりをあらわしている。⑩

南加クレアモントにラーネット博士を訪うて

老ひし師の閑かなる居を訪ひにけり

雪山を背にみかんなる里

神々し九十路を過ぎし師の姿

笑みます面は聖人の如く

その昔の京の都を語ります

師の面影を尊しとみぬ

信仰の光りがややく童顔よ

貴き道を歩み来し人

第二次大戦中、日米相たたかうことになり在米邦人は、なんらの予告もなく、突然敵国人であるということで即日とらえられ、収容所に入れられた。真珠湾の奇襲でショックを受けた米国は、在米邦人にことさらつらくあつた。内田さんもはじめは家族から分れてモンタナ州に抑留されたが、六カ月の後に、ユタ州の家族のいる収容所に移された。そのことを伝え聞いたラーネットは、家族の再会をよるこんで五弗の小切手を内田さんに見舞として送った。ときにラーネットは九十四才内田さんは五十八才、四十年前京都の同志社で結ばれた師弟のちぎりは戦争の暗雲のさなかにあつてもいささかもかわらなかつた。内田さんはこの五ドルの小切手をどうしても用うる気がしなかつた。これを銀行に入れて金

に換えてしまうにはあまりにも貴重な小切手であると思ひ、永くこれを保存することにした。のちに、彼は、この小切手をそのときおくれたラーネッドの手紙とともに母校同志社に寄附した。⑩

ラーネッドは、その翌年一九四三年三月十九日、九十五才の長寿を全うし淡々たる生涯を了えた。内田さん一家は、戦争中のことであり、引きつづいてユタの日本人収容所にとじこめられていたその悲報をはるかに伝えきいたがかけつけることが出来なかった。しかし、母かつはロスアンゼルスにあり、その葬儀に出席することが出来た。

ラーネッドは「自分が死んだら、若王寺に新島先生とともに埋葬して欲しい」とかねてから語っていたのを内田さんは憶えており、それをひそかにねがっていた。戦争後、同志社は、故人の意志を実現するためラーネッドの娘グレース・カーティス夫人に許可を求めたが、賛成を得られず、長くそのままになっていた。

しかし同志社は九十周年の記念事業の一つとしてラーネッドの墓を若王子に設けることを計画した。アメリカン・ボード関係者の理

解と、ピルグリム・プレイスの担当者の協力を得て、その分骨は若王寺に届けられた。種々の困難にもかかわらず関係者の熱意は善意ある応答をよびこの計画は実現された。とくにピルグリム・プレイスにおられたモラン氏は、実際上の手続きや世話をされた上、分骨送付の費用として十五ドルを個人で負担し同志社創立記念事業の費用として寄付されたことは銘記すべきことである。⑪

かくて、一九六五年十一月二十九日、同志社創立九十周年記念の早天祈禱会のと、ラーネッド博士の墓石の除幕式があった。墓碑録にはつぎのことばがきざまれている。

Dwight Whitnly Learned  
Born October 12, 1848  
Canterbury, Connecticut  
Died March 19, 1943  
Pilgrim Place, California  
For more than half a century  
Teacher, Scholar and Friend in  
Doshisha  
“Learn to Live and Live to Learn”

ラーネッドの墓が若王寺に出来たことをわがことのようによることだのは内田さんであった。彼は、恩師がそのことを終始ねがっていたことをよく知っていたからであった。

一九六五年同志社は創立九十周年を迎えるので二十億円を目標として、内外に記念事業の募金をしていった。内田さんは、かねてから同志社に感謝の意を表わしたいと思っていた。彼は、自分が一番感化をうけ、一家のものが世話になったラーネッドを記念して奨学金を設けることを考えた。一九六三年一月五日、不自由な左手で筆をとり、同志社の大塚節治総長と、高橋虔神学部長に書を認め、右の奨学金寄附の意を伝えた。内田さんは、自分の一家がいかにラーネッドに世話になったかを知るべ、その感化によって今日の自分たちがあることを感謝し、ラーネッド家と内田家の長年にわたる関係に触れたのちこうのべている。

「右の如き特別関係があった自分は、出来れば自分の一生のうちに、ラーネッド夫妻を記念して母校に幾分でも奨学金を寄附したい念願をもっていったが、自分は一生を俸給者として送り、富を造る機会なく、こ

れに加えて、二十四年間動続した三井物産会社の停年退職金と積立金の全部が日米戦争の結果、殆んど零に等しきものとなり自らは富を造ることが出来なかったのであります。

ところが、私は昨年十一月ストロークに倒れ、いま尚、闘病療養中至急に祖国が近づいたような気もするので、自分の現在もてる物をもって、自分の生存中に前記の宿望を実現したい考えが起りこれを実行する決心をいたしました。ついでには京都下鴨に在任の義弟、早石実蔵夫妻に依頼し左のごとく、代行いたさせますから何卒面接の上、ご受領下されたくお願い申し上げます。

一、金壹百万円也 ラーネッド奨学基金として贈呈する。

一、石は基金として据え置き毎年その利子又は配当を以て神学生奨学金として支給  
又は神学教育後援会の費用に充つ 以上  
一九六三年一月五日

総 長 大塚節治様  
神学部長 高橋 虔様  
内田 堯  
左手認

右の奨学基金は、早石実蔵氏の手により、同志社に届けられ、今日まで神学教育のため用いられている。内田さんは、自分のイニシャルにDという字を用いていた。多くの人はDというとDAVIDを考えるが、内田さんのはD W I G H Tで、恩師ラーネッドの頭文字をとったものであった。このような内田さんにとってみるなら、自分の名は用いずに、恩師の名をつけてラーネッド奨学基金としたことはむしろ当然のことであったが、いかに内田さんらしい心づかいであった。

#### 苦難のなかに

人の一生には順風のときもあるし、思うにまかせず焦れば焦るほど荒波にもまれてとまどうときもある。人の真価は、恵まれた境遇にあるときより、その人が逆境にあって苦しみを負うときに却ってあらわれる。順調なときにおごらず謙虚である人はすぐれているが、苦難に遭遇したときに、ぐちをいわずあきらめず希望をもって淡々と生きる人はさらに偉い。

内田さんの生涯は、決して平坦な道ではなかった。十才にして父を失い、孤独の中に刻

苦勉強につとめた幼少年時代の労苦は並大抵のものではなかった。しかし、若いときに苦しみながら励んだ経験は、彼を一層強い人にした。

「患難は忍耐を生み出し  
忍耐は錬達を生み出し  
錬達は希望を生み出す」

(ローマ人への手紙五ノ三)

このことばは、パウロの信仰体験であったが、それはまた内田さんの生涯にとっても真実なものとなっていた。

アメリカに移り、結婚をし、円満な家庭生活を営み、与えられた仕事に励んでいた内田さんは、順調な道を歩んだ人であったように思われる。しかし、彼の生涯にはいくつかの苦難の谷があった。それは、第二次大戦によって、敵国人として収容所に入れられ、いまままで築いていた資産をことごとく失ったときまた晩年最愛の妻郁子夫人に、はからずも先だたれ、十年にわたる闘病の経験をしたときなどである。それらのときにも、内田さんは決してとりみださず、苦難のなかに自分の運命をのろって自亡自棄にならず、却って奥ゆかしい心持ちをもって周囲の人々に慰めと励

しを与えていた。

真珠湾の奇襲によって日米の戦いがはじまり、これまで忍耐をもって両国の親善のためにと努力していた在米同邦たちは、にわかには敵国人としてとらえられるに至った。真珠湾のショックに動揺した米国は、在米邦人にきびしい態度でのぞみ、彼らは、男といわず老人、婦女子に至るまで強制的にキャンプに入れられた。キャンプというとおだやかに聞えるが、それは戦時臨時立退所ともいわれ、鉄のくさりの柵がはりめぐらされた強制収容所であった。

はじめ、内田さんは開戦の即日とともに検査され、家族のものと離れ、一人だけ遠く敵寒のモンタナ州に抑留されるようになった。

在米邦人が第二次戦争下になめた経験は、いまだに充分に記録されていない。邦人たちは、日米の友好をそねてはならないという配慮からも、自分たちのうけた苦しみを極力おさえて、自らの中におさめて耐えていた。内田さんも、あまり、そのことを語りたがらなかった。ただ、郁子夫人が折にふれてよまれたうたのはしばしに耐えない収容所の生活や別れ別れになった家族のことを案ずるおもいがあ

らわされている。

先述のように、戦争がはじまって内田さんは直ちにモンタナ州に移された。年があけて一月三日は、彼らが一九一七年結婚式をあげてから二十五年の記念すべき銀婚式の当日であった。モンタナ州は日本と同じ位の大きさをもつ大きな州で、米国のなかでも北のはてにあり、その緯度は北緯四十五度から五十度の間にあり、ワイオミヤや南ダコダよりさらに北にある極寒の僻地であった。カリフォルニアからは北上してロッキーの山脈をこえて約三日を要する旅であった。真冬でもオーバーのいらぬというサンフランシスコ一帯とは比較することも出来ない厳しい土地に収容されている夫を想うて郁子夫人はつぎのようにうたっている。

吾等 銀婚式当日

三日路を離れ住みつ今日の日を

祝ふも時の悲しさにして

さりながら感謝の心もゆるやかな

廿五歳の恵み想ひて

みめぐみをたたふる心一つなり

よし身は遠く別れ住むとも

(一九四二、一、三)

モンタナの冬はきびしかったにちがいない。内田さん達は約六カ月、そこで厳寒のときをすごした。やがて、西海岸の日系人の家族のものたちも立退所に強制収容されることになり、内田夫人は、二人の娘達をつれて加州タンホラン戦時臨時立退所に入った。馴れない収容所の生活では、人々はだまりこなっていた。収容所であてがわれた宿舍は馬小屋であった。多くの人が雑居して私生活もない状態であった。速くにいる肉親の安否をきづかい、毎日の不自由な食生活にじっと耐えながら、いつか馴れるだろうと思いつつも、みじめなキャンプの状況に心はとかくもりがちであった様子が夫人のうたのはしばしうかがわれる。⑭

一九四二、五一九、加州タンホラン戦時臨時立退所

異つ国にいつしか老ひし人々の

ただ黙しつつ物を食むなり

長き列に食器を持ちて加はれば

涙をかくすつつしみも失す

あちこちの囚はれの友想はれて

涙かくしぬ夕餉とりつ

愉しげに香の物食む

子等が顔馬小屋の夕

馬小屋を我が家とよびて四月経ぬ

慣るといふもなかなかにして

何となくいさかふ夕を此の部屋の

狭きが故とかこちても見づ

明けくれに私生活なき此の暮らし

二た月なれど慣れ難くして

さすがし朝日の映えし心地して

友の給ひし朝顔をめぐ

やがてその年の秋になり家族はユタ州トパ

ズの収容所に移り、内田さんもそこに移され

再会のときをもった。ユタ州はモンタナ州よ

りはかなり南であり、寒さは幾分楽であつた

が、それでも、ロッキー山脈のすぐ東側にあ

たり真冬は相まきびしい寒さであつた。ユタ

州の特徴は砂漠地帯であり、一面に茶褐色の

地が連綿とつづき、うるおいのあるみどりの

ほとんどない殺風景なところであつた。とき

として砂塵が立って眼もあけられないような

ことがあるかと思えば、夕焼に絶妙な色に空

が焼きつくざれることがあつた。郁子夫人の

うたによつてユタの収容所の生活をしのんで

みよう。<sup>⑬</sup>

ユタ収容所に

砂あらし小やみ後の夕焼を

泪ぬぐひて眺めつづけぬ

草も木も野花も生えぬこの里を

誰か名づけしトパズの町を

鳥を見しと子の指す方を眺むれば

朝映えの空まばゆかりしよ

空のめぐみしみじみ知りぬユタの端の

砂漠の中に送られしより

追はれ追はれ豊稔と呼ぶユタの地に

吾ら語りぬ加州の家を

金網の外の暮しをいとほしみ

落葉ふみつつ遠く歩めり

収容所の周囲がかわいた砂ぼこりにまみれ

殺伐としていると人の心もなにかしら荒れて

くるものであつた。そんなときにも内田さん

は、沈みがちな同邦の人々に、あるときは冗

談をいい、あるときはほうたをうたい、また、

あるときは仲間づくりの組織などをつくつて

励ましを与えた。そのころを偲んで種田七郎

氏はこういつている。

「戦時中わたしはユタ州のトパズという

転住所内で二カ年半を過した。その間種々

な人にお会いしたが、その中でわたしの最

も忘れたい人といつたら内田堯氏を挙げ

なければならぬ。内田氏はトパズ購買組

合組織に努力された。最初から組合長とし

て千人の同胞のため奉仕された。実に立派

な親しみのあるお方で氏に接する者は誰で

も氏の気高い人格にうたれるのであつた。

従つて組合の理事会でも他の理事達をよく

指導になり決して我意を通そうなどなき

れず献身的に物事に当たられたのをよく覚え

ている。

この内田氏につき忘れられないのは時間

励行ということだつた。毎週火曜午後一時

の理事会に一度だつて遅刻されたことはな

かつた。そのくせ、他の理事達が遅刻して

も嫌う顔一つお見せにならず、いつも笑顔

をもつて議事を進めて行かれるのであつ

た。」

内田さんは、意気消沈しがちな収容所の生

活を少しでも明るくしようと、入所まもなく

トパズの歌を作つた。その節にこううたつて

いる。

「七つ出たわいな ヨサホイノホイ

何でも感謝で 食べるならホイ

友の料理は なお感謝ホイホイ」

前記の種田さんは内田の想い出をこう結んでいる。

「信仰の深いキリスト教信者、人格の人、内田氏に接する機会を得たわたしには砂漠の中でのキャンプ生活も決して無意味ではなかったと信ずるものである。」<sup>⑩</sup>

米國を理解し、米國の底にあるキリスト教の精神に学び、祖国日本と米國の架け橋にならんと念じながら、大戦中不自由な生活を過した收容所の日々は内田さんにとっては鉛のような暗い日々であった。しかし彼は、その中で決して投げやりにならず、焦らず、むしろいらだちがちな周囲のものを励まし淡々とその日々を過したのである。

## 死

一九六一年、生来健康であった内田さんが突如発作がおこり右半身が不自由になった。いままではほとんど病気をしたことのなかった内田さんにとって一〇年にわたる闘病の日々がはじまった。郁子夫人は内田さんの闘病の姿をこうよんでいる。<sup>⑪</sup>

君脳血栓に倒る

頭の痛みはげしきままにもの言はぬ

顔を眺めて今日も帰りぬ

君も泣きわれも泣きけりともどもに

かたくなりたる手脚眺めて

(一九六一、十二)

他人の苦しみには意を用いても、自分の苦しみを人に訴えようとしない彼は、強い意志をもって耐え、右手が不自由になれば左手でペンを取り、ふるえながらも友人たちへの文通を交わしては安否を問うことをたのしみとしていた。内田さんは、病院に入ることを極力好まなかった。一つには、温かい家庭の生活から離れることは彼にとってしのび難いことであった。さらに、米國の医療費は尨大な経費を要することからも、自分のために多くの出費をすることを好まなかった。そのため家族がいくらすすめても入院はせず、忍耐よく自宅療養に励んだ。それだけに看病にあたる夫人や次女の淑さんの苦労は一方ならぬものがあつた。<sup>⑫</sup>

病院を好まぬ父をいとほしと

朝より夜にかしづく吾娘よ

フィールチェア運転のこつまずしくて

壁も柱もきずのいたまし

朝に夕に父をみとりてほそりゆく

娘にスープなどあたためてけり

「主よながために」と娘と二人朝早く

さめてひと時を泣く

(一九六一、十二)

これらのうたにみられるように郁子夫人はゆかしい心の持主であった。温和な性格で、やさしいおもいやりの豊かな人であった。いつも草花や小鳥を愛し四季おりおり、内田家には美しい草花が咲き、訪れる人々のみならず、飛び来る小鳥たちをよろこばせていた。すでにいくつかの作品を紹介したように夫人は和歌をつくられ、そのおりおりの心情を書きとどめられた。パークレーで和佐夫人が主宰された「在米婦人新報」に自作の和歌を発表して、作歌に興味を覚え、戦時中、ニューヨークで西村牧師の伝道雑誌「鴿」が発刊され、乞われるままに、毎月投稿をつづけ、一九五三年、西村牧師が「新葉」を刊行した際にはその一部が掲載された。<sup>⑬</sup>

いまその作品集から、いくつかをみるとそのころの夫人の心境を察することが出来る。

こしたか「幻は消えず」に寄す

御聖手のくしき御わざに導かれ

弱き時にも強められにき

友を迎え友を送りし家なれど

庭木のびつつ壁吉りにけり

老いにし者の務めもあれば夢多く

残る月日をつつしみてゆかん

(一九六二) ㉑

何が為めの五十メガトンの原爆ぞ

北極は己が領地といへど

北の極にサンタクロース住むといふ

幼き夢をなごて破るや

(一九六一、十二) ㉒

国と国の競ひて打上ぐるミッスルに

心和まず星仰ぎ居り

科学の力若人の夢破るなと

御空の月と星を仰ぎぬ

(一九六二) ㉓

ふるふ手に紅梅手折り今日の日を

寿ぐとのたまふ不自由の人

(一九六三、一、三) ㉔

駒鳥の群れて帰れし裏庭に

桜のつばみは赤らみてゆく

すきとほる駒鳥の声明るくて

ひと時はかり草とりに過ぐ

(一九六三、早春) ㉕

これらの歌の中には、病の中にも心のゆと

りを失わず、平和の中にも戦争への危険を憂い、不自由な身でありながら紅梅をもって結婚記念日を祝う内田夫妻の奥ゆかしい心情がよくあらわれている。

病床を慰めるものは花や鳥の外に人々のゆかしい心づかいがあった。郁子夫人の和歌のたしなみに刺激され内田さんも病床の日々にうたを作るようになった。<sup>㉖</sup>

八十路近く いたつきの日は 長けれど

神のめぐみの 新たなるを想う

いたつきを傷いて慰む 遠近の

友の情ぞ 嬉しかりける

床に居て 夜の明くるを 待ちわぶと

のたまひし 母は九十才なりき

吾れ病みて 同じ想いに ふけるかな

吾れ老いたると思ふこのごろ

これらは一九六七年十一月の作であり、病

床のなかにも神のめぐみをおもひ、そここ

の友人たちと安否を交わしては感謝している

内田さんの心情がよくあらわれている。

一九六五年同志社がその創立九〇年の記念

日を迎えたが、内田さんは秦孝治郎理事長に

あて、つぎの句を送っている。

寒梅が咲いて嬉しい九〇年

内田夫妻のねがいは、二人で手を携えて日本に帰り、京都の同志社を訪ねることであった。同志社は彼らの心のふるさとであり、京都の山河は彼らにとっては忘れ得ぬものであった。そのときを一九六七年とひそかに期していた。というのは、その年が彼等の結婚五十周年にあたるからであった。しかし、その

年を待たずして、思わぬ不幸が訪れた。すな

わち一九六六年十月三日郁子夫人が惚然と天

に召されたのである。長い間苦勞を共にしな

がらも、つねにおだやかに、豊かな情趣とやさしいおもいやりをもった郁子夫人の死は、

内田さんにとっては深い傷手であったにちが

いない。しかし、内田さんは、少しもとりみ

ださず、却って強い信仰に立って、周囲の人

々を慰めていた。郁子夫人が亡くなってから

一カ月して彼はこのような心境をうたっている。

悲歎より受けし恩寵いや深く

七十三才一生涯をわりぬ

愛情ふかく心やさしき人なりき

友は語りぬ彼女しのびて

一九六七年五月内田さんは、かねてからね

がっていた日本訪問の旅に出た。郁子夫人の

霊を心に抱いて、次女淑子さんにつきそわれ車椅子に乗っての京都入りであった。終始体に気をくばりながらも内田さんの意気は健昂八十三才の高令とはみえず、同志社の後輩達に無言の励ましを与えていた。内田さんは、郁子夫人を記念して、同志社女子大学に、内田郁子奨学基金を百万円寄附し、片親又は両親を失った学生を助けるように依頼した。

内田さんは、七月二日、長路の旅を終えてオーランドのわが家に帰って来た。不自由な身をフィールドチェアに托しての長路の旅はさすがに彼に疲れを与えた。しかし、夫人の分まで二人分の念願を果たし、いかにもホッとしておもいでこううたっている。

四千万里手押し車で帰り来ぬ

心は遠き洛陽の空

一九六九年の十二月内田さんは、また激しい発作を経験し、病床につくようになった。煩らしいの多い病床生活であったが、内田さんは、文句をいわず、小さなことにも感謝していた。とくに遠近の友からのたよりをたのしみにし、手紙をもらうと淑子さんに代筆してもらって返信をおくったりしていた。同志社のスカラシップのことは、おわりまで内田さ

んの頭をはなれず、病床からも想い出すように、あそこの誰々に依頼したのはどうなったろうかと一人言のようにたずねていることがしばしばであった。

死は、内田さんにとっては古くからの友人であった。十才にして父を失い、九十一才の高令の母をおくり(一九五三年)、忽然と最愛の夫人の死に遭遇し、いままた、自らの死に直面するに至った。彼は死の壁の厚さをよく知っていた。人間がどんなにがいてもものりこえることの出来ない深淵が死であった。しかし内田さんは、取りみだしたり、嘆き言をいわなかった。もちろん、彼とても人の子であり死のおそろしさを覚えて黙することが少なくなかった。また、長い闘病生活の中には、煩わしいことや思うにまかせぬこともあり、つい短気になることもさえた。しかし、彼は死を究極的な敵とみなしていなかった。たしかに死の克服は、人間にとっては不可能であり、キリストの復活の信仰よってのみ死に對する勝利があることを確信していた。死にとらわれていても、それが最後ではなく、死は生命に包まれていることを覚えるときに、彼は一つの安心と希望をもつのであった。

多くの人々が彼の病床をたずねた。案じて見舞に来た人々が、彼の落ち着いた姿にふれて却って慰められることが多かった。淑さんは、自分の執筆活動を犠牲にして父の看病に励んだ。とくに、病状が悪くなってからは、昼夜をついでの世話は大抵ではなく、一時は、彼女の方が健康をそこねるのではないかと思われることもあった。

内田さんは、「淑がよくしてくるので、わたしはしあわせです。」と来る人に語っていた。わたしは、一九七〇年の十一月の末に病床の内田さんをお訪ねした。そのころは、ほとんど寝たつきりで、小用もとってもらうほどの状態であった。それでも意気はまことにさかんなるものがあつた。遠く伝えきく変転はげしい大学の状況におもいを寄せ、同志社の発展を祈る気持で一杯のようであった。あまり長くなつてはと思つて、握手をし折りをともにして病室を出た。しばらくして、ベルがなり、もう一度おあいしたいからというので再び内田さんの部屋にゆくと、「神学生のスカラシップをシャトルの某さんに依頼してあるから」といわれた。傍らの淑さんに伺うと、奨学金のことが、つねに内田さんの頭の

中にあるらしくうわごとにまで語っていたようである。そして、「よくなったら、同志社の一〇〇年祭には、又日本にゆきたいと思えます。どうか同志社のみなさんによるしく伝えて下さい」と静かにいわれた。それは、いつもの内田さんの淡々とした声であったが、いく分か病床の疲れでしわがれていた。想えば、これが、わたしにとっては、内田さんの最後のわかれのことばとなった。

明けて、一九七一年一月八日、安らかに眠るように息をひきとった。走るべき道のりを走り、戦うべき戦をたたかい、使を果した旅人が、約束のふるさとに帰ってゆくような姿がそこにあった。ときに、八十六才であった。

彼の属するシカモア教会は、一月十三日の午後七時三十分から葬儀の式を催した。通常米国でも、葬式は午後二時から三時に開かれることが多く、夜に行われることは稀であったが、在米同邦たちの間では、日中は労働に励み職場を離れることがむづかしい人々もあるという配慮から夜に行われることが多かった。生前から彼と親しかった人々、彼と共に苦楽を共にした人々、彼に励まされた人々、白人

もいたし、黒人もいたし中国人もいた。年若い一世代や働きざかりの二世や若い三世たちで一杯であった。

故人の希望によってうたわれた讃美歌は、悲しみのうたではなく神の国への凱旋のうたであった。

ものはかわり 世は移れど

うごかぬは みくに  
いざやうたわん われらともに  
とこしなえの うたを

詩篇二十三篇とヨハネによる福音書一四章一節から六節までが英語と日本語でそれぞれ読まれたのち、W・ポーター牧師が祈禱をささげ、讃美歌「きよき岸べに、やがてつきて」(四八九番)がうたわれ、F・アダムソン牧師と、藤森惇一牧師がそれぞれ故人をしのんで式辞をのべた。教会員を代表して故人の親しい友人である宇野由之氏は追悼のことばをこう結んでいる。

「内田さんは、与うるは受くるより幸なりという聖言を一生を通して実行した人でありました。しかも右の手にすることを左の手に知らさなかった。善行を広告したり、恩にきせたりしなかったのであります。

八十六才の天寿を全うし、教会員たちから慕われ、家族からは愛され、大切にされ、召天された内田さんは、今、「汝善かつ忠なる僕、汝わが喜びに入れ」と父なる神の祝福を受けておられることと信じております。」

故人を惜しみ慕う人々の列は長く続いていく。夜のとばりは一入暗く、物静かに感じられた。しかし、その暗やみは、復活を象徴する朝の光によって包まれていた。人々は、彼の死を惜しむと共に、彼の生涯の中にもついていた一つ一つのめぐみのつゆを想起しては深い感銘を覚えるのであった。

#### すみれ草

大分以前のものであるが内田夫人のうたにこういううたがある。<sup>20</sup>  
すみれ咲きければ  
地にひくく香りゆかしきすみれ草  
心たらへる汝が姿かな

すみれは、小さな植物であり、まことに地味な姿をもっている。バラのような豪華さや白百合のような気高さもなく、地に低く咲いている。しかし、それは、地道であり、ゆか

しい色と香を放っている。また、すみれは、ごく平凡な山道に咲いている。人々にふまれそうになるし、よく気をつけないと識別されないときさえある。日常性に埋没されそうに存在がすみれである。イエスが野の花をさして、「栄華をきわめたときのソロモンでさえこの花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」<sup>(27)</sup>といつたのは小さなすみれのような野の花をさしていわれたにちがいない。

考えてみれば、人の一生はすみれの花のようにはかないものである。それは詩篇の詩人がうたっているように労苦の多い短かな人生にすぎない。

「わたしたちのよわいは七十年にすぎません。

あるいは健やかにして八十年でしょう。しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです」<sup>(28)</sup>

誰しも長生きをしたいと思うし、華やかなバラ色の人生を送りたいと思うのが世の常である。中には、高嶺に咲く花となる人もある。しかし、多くの場合人間は野に咲く花で

あり、目立たず、名もなく、さしたる光彩もなく一生を終ってゆく。しかし、その野の花に生命が宿っており、それが無限の貴さをもっているという聖書の視点は、庶民の日常性に深い示唆を与えるものといえよう。

思えば、校祖新島襄が同志社を設立するにあたって念願としたのも外ならぬ人民の教育であった。彼は、一国を興すものは、一人の英雄ではなく、知識あり、徳育あり、良心のめざめた人民であることに着眼し、その教育の場として同志社大学を設立したのであった。彼にしてみるなら、一国の政治的指導者や官僚機構の支配者の教育は、官立の大学に委ね、野にある私学同志社は、知識と良心をかねそなえた人民の教育を旨としたのであった。今日でこそ、大衆社会における中間層の果たす役割りがとかれ、公害問題などからんで住民運動の重要性が注目されているが、新島が同志社の設立を意図した明治の初期においては、多くの人々は英雄豪傑となり名を後世に残し、故郷に錦を着て帰ることを人生の目的としていたことを思うとき、良識ある人民教育をめざしたことは新島の卓見であったといわなければならない。

内田堯氏の生涯は、そのような新島の教育の精神にこたえた一例であった。彼の生涯は決して派手なバラ色の生涯ではなかった。幼くして父を失い、貧乏の中にも苦学して学び仕事をなし、戦争のために永年築いた財産を失い、年老いて永く病み、その中に最愛の妻に先だたれ、死のおそろしさをいつも背中あわせに体験してきた生涯であった。彼の生涯は決して特異なカッコよい人生ではなかった。むしろ内側からみるなら、苦難に耐えながらも、信仰をもって淡々と生きた生涯であった。それは、野に咲く市民としてのすみれ草であった。

わたしたちの歴史は、あまりにも特異な英雄を中心とした歴史であることが多い。しかし、歴史を生かすものとして重要な働きをするのは、英雄的指導者であるより、良識あるめざめた人民であることが少なくない。やがて一〇〇年を迎えようとする同志社の歴史もそのような視点からもう一度見直してみる必要があると思う。

内田堯氏は、不思議な導きによって、同志社に学ぶことにより、キリスト教の人格主義

にふれ、与えられた賜物を生かして神と人に仕え、めざめた一人民としての生涯を全うした。内田さんの生涯をしのぶにつけても、人民教育を同志社大学設立の趣意にうたった新島襄の精神が、今日に大きな意味をもっていることを痛感するものである。

(註)

- ①同志社におくった内田氏の一九六三年一月五日付の書簡から
  - ②内田淑さんが父から聞いたことば
  - ③Olis Cary, *History of Christianity in Japan Vol. I—II, 1909.*
  - ④内田郁子、ゆかり抄、一九六七、一三〇頁
  - ⑤一九一七年から一九七一年まで内田さんは引きつづいてサンフランシスコ地区にいたわけではなく、一九二三年には東京に、戦争中は収容所に、終戦直後にニューヨークにしばらくいた。
  - ⑥内田氏の葬式のとときの追悼の辞から
  - ⑦住谷悦治著、日本経済学の源流——ライネッド博士の人と思想
- リベルタス叢書、教文館、一九六九

- ⑧前掲書 七十五頁
- ⑨前掲書 七十三頁
- ⑩前掲書 八〇頁
- ⑪内田郁子、ゆかり抄、五十八頁
- ⑫前掲の内田氏の書簡参照
- ⑬住谷悦治、日本経済学の源流、一四五—一四六頁
- ⑭内田郁子、ゆかり抄、六十四—六十五頁
- ⑮前掲書 六十六—六十八頁
- ⑯種田七郎氏の内田堯氏の追悼文、パークレー内田家
- ⑰前掲書 一四七頁
- ⑱前掲書 一四八頁
- ⑲内田郁子夫人の歌集は「ゆかり抄」の題の下に一九六七年発行された。これは夫人のうたを次女の淑子さんが年代順に整理し弟の榎垣実氏が編集、印刷の労をとられたもので、一六八頁からなる美しい書物である。
- ⑳前掲書 一四八—一四九頁
- ㉑前掲書 一四六頁
- ㉒前掲書 一五一頁
- ㉓前掲書 一五二頁
- ㉔前掲書 一五三頁

㉕これらの内田さんのうたは、ノート・ブックに書き込まれ、内田家に保管されている。

- ㉖内田郁子、前掲書 五十一頁
- ㉗マタイによる福音書 六・二十九
- ㉘詩篇 九〇篇十

後記

内田さんは自分が死んだのち、母校同志社に、さらに百万円の寄附をするようにという遺志を残した。これにしたがって息女淑さんは、一九七一年秋、来日され同志社を訪問し、右の寄附をされる予定とうかがっている。さきにライネッドを記念した奨学基金(百万円)、郁子夫人を記念した女子大生のための奨学基金(百万円)に加えて、さらに、百万円の奨学基金を同志社に学ぶ後輩のために設けられたことになる。